

ブルネイの教育事情 ～教育の特徴とは～

シンガポール事務所

このたび、東京都世田谷区の教育交流調査への活動支援でブルネイの公立学校および私立学校を訪れましたので、その様子を交えながら教育制度をご紹介します。

1 ブルネイってどんな国？

ブルネイは、東南アジアのボルネオ島（カリマンタン島）の北部に位置する国です。正式名称は、ブルネイ・ダルサラーム（Brunei Darussalam）といい、マレー語で「永遠に平和な国」の意味があります。面積は5,765平方キロメートル（日本の三重県とほぼ同規模）の国土に42万人ほどの人々が暮らしています。公用語はマレー語ですが、教育省のバイリンガル政策により、英語が初等教育から必修科目となっているため、英語も広く通用しています。

ブルネイは小さな国ですが、治安が良く自然災害が少なく、自然と天然資源に恵まれ、石油や天然ガスを世界に輸出している豊かな国です。東南アジアではシンガポールに次ぐ高い経済水準と充実した社会福祉を実現しており、ブルネイ国民であれば原則、医療費（公立病院）や教育費（公立学校）は無料で、個人の所得税もかかりません。

ブルネイ国の位置



2 九九の歌ではなく12×12の合唱・・・朝礼時に算数！



今回訪問した Sekolah Rendah Haji Mohd Salleh というブルネイのローカルの小学校では、全校児童はムスリムのため女子児童は全員「ムジャブ」という布をかぶり、男子児童は「ソソコ」という黒い帽子を着用し毎朝行

われる全校朝会に参加します。朝会は日本式に「前に倣え」という号令の下、児童はきちんと一列に整列し、国歌斉唱、祈りという順番で進められ、最後に九九ならぬ1×1から12×12までの歌の合唱で終わります。ブルネイでは暗算が苦手な人も多いため、この学校では、低学年から自然に身につくように工夫していると副校長先生が説明してくれました。

3 ブルネイの教育制度の5つの特徴

○特徴1 教育費無料

ブルネイでは豊富な天然資源による収入を背景に、6歳から15歳に至るまで公立の教育機関はすべて無償です。例えば総合大学であるブルネイ・ダルサラーム大学では、ブルネイ人学生に対して授業料が無料であるだけでなく、毎月350ブルネイドル（約29,000円（2016.3.16現在））の奨学金が支給されます。また、海外の大学に進学する場合も、政府系、企業系、各種団体系の奨学金が提供されています。

○特徴2 1年間のプレスクール

ブルネイでは、小学校入学を前提とした1年間のプレスクールに通学することが義務付けられています。プレスクールでは小学校入学の準備として小学校と同じ場所で文字や数字の読み書きを勉強します。

公立校の場合、子ども達の通学する学校は、住所によって決められるためプレスクールとして通った学校がそのまま入学する学校となります。

小学校内にあるプレスクールの様子



○特徴3 学年終了時の学力テスト

ブルネイでは、学期末にアセスメントテストが実施され、課題の評価、出席日数も考慮しながら、学年末で最終的に進級するかどうかを学校が決定します。つまり義務教育でも一定の基準に達していないと進級することができないのです。そのため、飛び級や留年する生徒がクラスに混在しており、日本のようにクラス全員が同じ年齢とは限りません。

一人でも多くの生徒が進級できるよう、学校では生徒の学力別にクラス分けを

行っており、学力の劣る生徒に対しより多くの教員を配置し、全体的な学力の底上げに力を注いでいます。

○特徴4 義務教育の一環であるイスラム教教育

ブルネイでは、MIB（Melayu Islam Beraja）というマレー主義・イスラム国教・王政を擁護するという、いわゆるブルネイ国民としてのたしなみを必須科目として学びます。

子どもたちは、中学2年生になるまで義務教育の一環として宗教教育を受けなければなりません。午後になると宗教教育を受けるために宗教学校へ通います。

宗教学校ではコーランを読むための語学学習や、イスラム教における戒律や道徳等について勉強をしています。午前中の学校がそのまま宗教学校として使われる場合もありますが、そのような対応を行っていない場合は、生徒たちは別の宗教学校に通うことになります。

イスラム教の習慣として、金曜日と日曜日が休日となるため、授業があるのは月曜から木曜までで、土曜日の午前中は、授業・課外活動・宗教教育などに使われています。

ドラマ学習の授業（中学校にて）



○特徴5 英語とマレー語の二か国語教育

ブルネイでは、母国語であるマレー語の地位と重要性を維持しつつ、英語の持つ経済的効用と国際性を考慮して1984年からマレー語と英語による授業を行うバイリンガル教育政策を開始しました。英語を習得することは安定した英国系石油関連企業の就職できる近道として生徒や保護者から必要性を受け入れられています。

ニュージーランドから教員を招致（英語教育）



ブルネイの学校では、国語とMIBの教科以外は、すべて英語で授業が行われています。

4 ブルネイの子ども達

明るい笑顔の子ども達



ブルネイでは3つの小中学校を訪問しましたが、児童生徒たちは皆素直で、温厚な様子が窺えました。校内では、年齢にかかわらず、目が合ったり、すれ違ったりすると恥ずかしそうに微笑みながらあいさつをしてくれました。各学校を訪問するたびに、私たちは一瞬、政府の要人かスターではないかと勘違いをしてしまうほど、大歓迎の出

迎えと温かいおもてなしを受けました。

ブルネイには日本の車、電気製品、アニメなどが多く輸入されています。そのため、子ども達は、それらを通して日本を知り、ハイテクで綺麗な国というポジティブなイメージを日本に対して持っています。

5 子ども達の送迎で一日つぶれる？ 保護者の負担

教育に関する親の負担は多かれ少なかれの国でもありますが、ブルネイでは子どもたちの送迎に係る保護者の負担が非常に大きいことに驚かされます。ブルネイでは基本的に移動は車であるため、歩道がほとんどありません。そのため歩道らしきものを歩いている人は、ほとんどが旅行者だとわかってしまうとか。バイクも自転車も見かけることはない上に、公共のバスやタクシーも台数が少ないため、一定の場所でしか利用できません。そのため必然的に自家用車による学校の送迎は保護者の重要な役割の一つとなり、学校の始業と終業時刻には学校周辺の道路は大渋滞します。更に午後の宗教学校への通学にも、その都度保護者が車で送迎をしなくてはなりません。

このような事情で、企業などでは昼食時間を長めに設定しています。

6 ブルネイの教育課題

義務教育費も、医療費も個人所得税もない、まさに国名どおりの「平和な国」ブルネイ。社会福祉も充実し、国民が希望すれば高等教育までも国が負担するなど、国民の知的能力向上に力を注いでいます。

学力別授業の様子

今回の視察で、のんびりと平和的な学校の雰囲気にも心身ともに満たされた「ゆとり」を感じました。一方で、出会った子ども達からは、学習に対する貪欲な競争力をあまり感じませんでした。



生活や教育に関する費用が掛からないということは、あくせく働かなくても、ある一定の生活レベルを維持できることであり、一見天国のように思えます。しかし、私は、一定の制約があるからこそ、生活や学力レベル向上のモチベーションが上がるのではないかと今回の視察を終えて感じました。

ブルネイでも、より安定した高給の職に就くためには高い教育と学歴を身につけることが必要であり、わざわざ高い学費を払って私立学校に通わせたり、海外の大学に留学させたりする保護者もいます。そのため、優秀な頭脳の国外流失が問題となっています。

国家を発展させる人材をいかに育成し、国内に留まらせることができるのか。この問題は資源依存からの脱却をめざすブルネイにとって課題の一つになっています。

小さな国が国際社会で輝き続けるために、国として教育を大切にしながらどのように力を入れていくのか、引き続き調査研究してまいります。

(堀江所長補佐 栃木県小山市派遣)

CLAIR